オンラインレクチャーシリーズ 第1回 菊幸一氏講演

体育社会学研究とは何か：その経緯から考える

2025年7月25日 18:00～20:00

講師：菊 幸一氏（国士館大学）

司会進行：清水 諭（筑波大学）

清水：ご存知のように菊先生は日本体育・スポーツ・健康学会の会長でありましたし、その副会長もやられておりました。また、日本スポーツ社会学会の会長を3期6年、そして日本体育学会の体育社会学専門領域の代表も3期6年やられており、体育、そしてスポーツ社会学、体育社会学について俯瞰的に語っていただける方でございます。

もちろん、『学校体育のプロモーション：体育社会学からのアプローチ』（菊幸一，創文企画，2022）ほか、著書そして体育社会学に関する論文も多々ございますので、トップバッターとして指名させていただき、快諾していただきました。

それでは、菊先生に約1時間講義をお願いいたしまして、その後は皆さんから自由にご質問、ご意見等いただければと思いますので、よろしくお願ひします。菊先生、お待たせしました。よろしくお願ひします。

【菊先生の講義】

〇はじめに

はい、それでは始めさせていただきます。今回のレクチャーは大変よい企画だと思いますが、私がこんな大層なことがしゃべれるかどうか今も不安ですけれども、お題は「体育社会学研究とは何か：その経緯から考える」ということで、とても1時間でしゃべれるような内容ではないとは思いますが、今回は経緯から考えるということですので、時間軸というものを据えて、どういう歩みをしてきたのかをレビューしながら、特にスポーツ社会学会が一方にある中で、体育社会学が今、独立して学会を作ったということで、社会学と体育社会学との関係を含め、それらの関係をどう考えたらよいのかについて少し議論してみたいと思っています。

講演の内容は、おおよそ4つに分けていますが、まずは「何か」という問いに対する答えを出すためにどういう視点があるのかということをお少考してみたい。それに基づいて、「制度」としての体育社会学、とりわけ社会学の分野は、いろいろな次元で研究が行われていると思いますが、学会という制度の中で体育社会学は何を研究してきたのかということについてレビューをしてみたいと思います。

次に、体育とスポーツというものを切り分けたときに、やはり近代社会、近代以降の「体育」と「スポーツ」の成立が問題となります。前近代から近代に向けて、その成立をめぐって、体育とスポーツの、特に両者の「概念」がどんなふうにつえられるのか、そこから体育社会学とスポーツ社会学との関係を見てみたいと思っているわけです。

そして、この2つの関係をベースにしたときに、これからの体育社会学に問われているのは一体何なのか、ということをお私なりに考えてみたいと思っています。

どうも全体としては、スポーツ社会学が独立して以降、後ほど述べますけれども、いわゆる体育現象、特に体育現象が現れるのは学校体育ということですから、これを対象にした研究が隆盛してきているとか、少しずつ増えてきているという印象を持ちます。それ自体に問題がある、ということではもちろんないのですが、体育社会学の対象や応用範囲というのは、単に学校体育の現象だけにとどまらない

のではないかと。むしろ、日本のスポーツを考える場合には、体育社会学的な研究視点というのがスポーツ社会学を考える上においても大変重要な意味を持つのではないかと。特に社会学という学問的なカテゴリーからすると、そこに大きな説明概念といえますか、説明をしていくキーワードや研究視点が含まれているのではないかと、というようなことを私は考えております。ですから、最後にそういった点から、本レクチャーのテーマを少し深掘りして論じてみたいと考えているわけです。

0. プロローグ：「体育社会学研究」への私的関心【スライド p.2～p.3】

最初に、プロローグということで、『体育社会学研究』への私的関心」というタイトルを付けてみました。実は、私、1979年というと、今から46年前ぐらいですかね、まだ生まれてない方もいらっしゃるかと思いますが、この年に大学4年生で卒業論文というのを書かされました。その卒業論文が、これなんですね【スライド p.2】。「日本体育学会発表に見る体育社会学的研究報告に関する文献的研究」。何か大層なタイトルなんですけど、当時は1950年から79年、約30年間の報告を収集したのですが、なぜ1950年からかということ、この年が日本体育学会が発足した年だからです。

で、先ほど、高峰会長の挨拶にもありましたけれども、1962年に体育社会学の専門分科会ができるのですが、1950年から62年の間にも学会では社会学的な研究報告なるものがあるので、それらも全部含めて79年までの報告数が大体数えたら1,134報告だったということです。これを抄録のレベルですけども、現在のようにキーワード検索とか、それに基づいて言語分析をしてみるとかいったことがなかった時代ですから、全部片っ端から読んで、(ある意味では自己流に)それらを分析した結果が、【スライド p.2】の表ということになります。

まず、研究傾向というのがあります。後ほど今日までの研究傾向については改めて詳しい話をしますが、このような研究傾向に対して、なぜこういう研究が行われたのかという社会的な背景を探りました。学問もその社会的な背景に当然のことながら左右されるわけです。表の中の矢印は、そういう社会的な背景の中でどういう研究というのが出てきているのか、あるいは出てこざるを得なかったのかについて、その関連性を自分なりに体育社会学とはいったい何なんだろうかという、当時の素朴な問いかけの結果として表すと、こういう一つの表になったということなんですね。

で、その当時、私がどういう結論を出していたかと言いますと、要するに「体育社会学」というのは、社会的背景として起こった出来事に基づいて、体育やスポーツに関連した出来事を後追いしている研究がほとんどで、研究者自らが課題を先見的にビジョン化して問いかけているのではなく、どうも社会の変化に規定された体育やスポーツという現象を後追いして、後付けして説明している、そういう学問なんだなという風に結論づけました。(今から思うと)大変生意気なことを書いているんですけど、私自身は当時「体育社会学」に対してそういう関心と理解を抱いていたということになります。

さて、その後も研究を続けてきたわけですけども、こういう体育社会学的研究そのものに対する私的関心を抱き続けてきたせいも、ざっと見るとこれまで【スライド p.3】にあるような、こんな論文や本を書いているんですね。【スライド p.3】で、今日お話しする内容というのは、ここにある1番と2番と特に6番のものがベースになりますが、この6番の論文は、『年報体育社会学』第1号で、私が冒頭に書いた内容です。ただ読むと何かまどろっこしく難解な内容になっていると思いますので、本日のレクチャーではこの6番を中心にして、なるべくわかりやすくお話ししてみたいと考えています。

また、【スライド p.3】の最後に記されている本は、先ほど高峰会長からご紹介のあった今度新たに出版される予定の『体育社会学の課題と展望』というものですが、その中で私が分担執筆した「学校体育の価値と制度」という章も参考にしながら話を進めていきたいと思っています。

I. 「何か」という問い (Question) に答える視点【スライド p.4】

「何か」という問いに答える視点を考えると、まず 1 番目に「これまで『何』を研究してきたのか、つまりどのようなテーマを研究してきたのか」ということが当然出てきます。

そして、それに付随して「その目的・方法・理論」が出てきます。理論を伴う方法を方法論と我々は言っていますが、いわゆる「研究デザイン」というものがどういうものであったのか、ということです。ただ、これはそれぞれに特徴があって、なかなか細かくそのお話しすることができないのですけれども、研究レビューをしていく中で、どういう批判的な見解や内容が展開されたのかということぐらいはお話しできると思います。

3 番目は、スポーツ社会学と体育社会学との関係です。少し結論めいたことをここでお話しすると、どうも私たちは「スポーツ」と「体育」というフレームをフェノメノン、すなわち現象として見ている傾向があるのではないかと、それは例えば、チャンピオンシップ・スポーツ vs. 学校体育とかですね、そういう形での見方です。それは、哲学的に言えばデノテーション (denotation) という用語、すなわち「外延」という概念で見たものです。研究対象を「現象」で見えていくことによって、そこから研究のテーマを設定するというような、そんな見方ですね。

それに対して、これは私が主張したいことなんですけど、(現象ではなく)「概念」としてもう一度「スポーツ」と「体育」を見直してみたらどうだろうかということなんです。これは哲学用語ではコノテーション (connotation)、内包という言い方をしますけれども、概念としてスポーツと体育を見たときに、そこにどういう共通性と違いが見られるのかということです。我々は、よく体育は教育として扱われる運動やスポーツであると言います。それに対してスポーツは広く、教育にとらわれない社会や文化の中で見られる現象であるというふうに見るわけですね。しかしながら、スポーツ教育という言葉もあるように、近代以降、スポーツというのは教育とやはり密接な関係を持っているわけで、その部分をどういふような関係として捉えていくのかによって、それぞれ相互に境界を作りながらも、関係しているという、そんな関係性が見えてくると思うわけです。

そう考えた時に、日本の場合にはどういう特徴が見られるのかということ議論することができるのではないのでしょうか。例えば、1968 年に有名なメキシコ・オリンピックのスポーツ科学会議で「スポーツ宣言 (Declaration on Sport)」が出されましたが、そこではスポーツが遊戯の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動だというふうに定義しているわけです。これは当時の日本の体育界、あるいはスポーツ界にとって非常に衝撃的だったと言われてます。というのも、この定義では「教育」の「教」の字も出てこないですから。スポーツというのはとにかく遊戯なんですよってというような発想が、当時の日本ではあまりなかったからです。競争とか、そういうのは受け入れるにしても、自然の障害というのが何でこんなところに出てくるのか、ということも当時はいろいろ議論されたというふうに聞いています。ここには、例えばスポーツを捉える時に Leisure としてそれを捉えるのか、あるいは Recreation として捉えるのか、こういう違いというものも日本人はあまり区別できなかったということなんです。

いわゆる現象としては、両者とも同じようにスポーツをやっているわけじゃないかと。みんな楽しんでやっているのは同じなんじゃないかということなんですけれども、概念としては、Leisure と Recreation というのはある意味で、捉え方によっては明らかに対立する概念でもあるわけです。例えば Leisure としてのスポーツは、長くそのスポーツを楽しむということが目的になりますから、ヨーロッパでのスポーツはリーグ戦が中心になる。なるべく長い時間をかけて楽しむ時間を増やすこと、延長することが目

的になる。その原点には、同好の士が集まるクラブをつくってスポーツを行うという発想があるわけです。ところが、何らかの手段としてスポーツを見ていく場合には、早く結果を出すための一騎打ち、すなわちトーナメントってものが中心になる。つまり、それは（非日常的な、一過性の）イベント・スポーツなる。スポーツをイベントとして捉えて、そこで一気に、なるべく短時間で決着をつけるということがスポーツのメインになって、どちらかというと日本はこの発想（Recreation）がやはり非常に強いということなのではないかと思うのです。

そして、このような発想のベースには、実は体育的な考え方や思考が存在しているのではないかと、という1つの見方があるということなのです。こういう見方というのは、研究者自身にも実は深く染みついていてのではないかと、いうふうに私は見えています。つまり、研究者自身の思考といえますか、考え方には、ある種オートマティックに植え付けられた体育やスポーツをどう見るのかに関する身体性（体育人的身体）のようなものがあるのではないかと。これはウェーバーに言わせると一つのエートスみたいなものかもしれませんが、体育やスポーツを研究する者が育ってきた、その存在の被拘束性に関わる問題です。自分たちは何か純粋無垢のように育ってきているように見えるんだけど、実は自分たちが育ってきたそういう体育的環境という存在に対する被拘束性に基づいて、体育やスポーツへの見方や考え方が知らず知らずのうちに固定化されてきているのではないかと、いうことです。そういう学的なハビトゥスみたいなもの、そういうものをもっと自覚していかないと、体育とスポーツの関係が概念的にうまく捉えられないのではないかと、いうことなのです。

【スライド p.4】の最後にも書きましたが、我々のスポーツ経験はどうしても体育制度の中で行われます。そこではフォーマルなイベント・スポーツが中心になるのに対して、例えば「道草」と言われる中で、子どもの頃自由に遊んでいた **informal sport** の重要性が忘れられがちになります。それは、第3空間、すなわちそれは第1空間の家と第2空間の学校や職場の「間」にあるのですが、この道草感覚や道草空間といった、この第3空間で発揮される自由な発想に基づく、純粋なプレイ（遊び）としてのスポーツ経験というのが、なかなかスポーツを研究する場合の1つのベースにならない状況につながってくるのではないかと、いうことです。やはり「制度」として体育があって、その中で私たちがスポーツを経験してきていることが、研究者自身の思考の身体性（認識枠組み）にも大いに関係していると思うわけです。

II. 「制度」としての体育社会学は何を研究してきたか【スライド p.5~p.10】

では、制度としての体育社会学、要するに先ほども申し上げた学会で、何を研究してきたのかということレビューしてみましょう【スライド p.5】。

【スライド p.5】の図1は、先ほど紹介した「体育社会学の再生を求めて」（菊幸一（2020）、年報体育社会学, 1:1-13）という論文の中で書いたものをそのまま引っ張ってきたのですが、2024年までではなく、2019年までのデータになっています。これをざっと見ていただくとわかると思いますが、【スライド p.7】の研究コード表に基づいて、体育社会学の上位5位までの研究傾向を累積数のパーセンテージでから比較したものになります。

1950年から大体60年まで戦後の研究が始まった頃というのは、少し見づらいいんですけども、点線の折れ線グラフですね、これが2つあります。その1つが「②II-6 教育、学校、指導、教師」とカテゴライズされるものです。もう一つは「⑤III-3 集団」にカテゴライズされるものになります。この当時は、後で詳しく申し上げますけども、学校の小集団研究、スモールグループ研究ですね、これが非常に盛んであったということなのです。

そして1960年代を過ぎて、70年代ぐらいになりますと、次の山「③Ⅱ-7 地域社会、都市、農村、家族」ですね、特にコミュニティという言葉がよく出てくるんですね。いわゆる地域のスポーツにおける地域は、当時社会体育という言い方をしていましたけれども、そういう研究テーマが非常にたくさん出てくるということです。

それから80年代以降、2000年ぐらいまでの間をみていくと、「①Ⅳ-3 社会的性格、パーソナリティ、動機、意識、態度、イメージ、行動」という研究コードに入るものが盛んになってきます。95年から99年あたりは、もうかなり多いですね。後からもまた詳しく説明しますが、どちらかという和社会意識の対象としてのスポーツというか、スポーツへの参加意識ですね。いわゆる意識調査というのがものすごく盛んに行われてた時代になるわけです。そういう量的な調査に対しての批判というものも、当然この中から出てくるということになります。

そして2000年を過ぎた頃になりますと、「④Ⅱ-5 政治、制度、行政、企画、管理、運営、組織、施設」という研究コードが増えてきます。これは、おそらく制度として、例えば「スポーツ振興基本計画」ができるとか、2000年に入っているんな行政の動きが出てくるわけで、これに呼応する研究であるというふうに見られます。

近年の2010年から15年、19年あたりに出てくるのが「②-6 教育、学校、指導、教師」、つまり戦後間もなく行われていたジャンルである学校体育の問題で、最近になってまた出てきているという、そういう傾向が全体として見られると言うことになります。

参考のために、それぞれの研究コードに基づく分類内容がどれだけの数(%)であったのかということについて、体育社会学専門分科会ができる前の1950年から最近の2019年までの傾向を示したものが、【スライド p.6】になります。これは「体育社会学の再生を求めて」にも載っておりますので、あとで参考に見ていただければと思います。

さて、これまで述べてきたことを再度、まとめてみたものが【スライド p.8~p.9】になります。1950年代は「体育授業(集団)」、特にスモールグループですね、小集団研究というのが盛んに行われる。この背景には、戦後間もなくの日本社会に対する民主化への強い要請があったと考えられます。つまり、スモールグループ研究の目的は、いかに民主的な人間関係を育てていくのか、ということになります。これが、体育社会学からの体育授業におけるグループ学習の提案というところにつながっていくわけです。

1960年代では、この「学校体育の社会学」が引き続き行われるのですが、そのインパクトは、どちらかというとチャンピオンシップ・スポーツを体育がいかに育てていくのか、体力づくりとか技術の向上にいかにか資するかという、そういうテーマと関連付けられていきます。これは、明らかに1964年の東京オリンピックの影響が強いと同時に、学校の全国大会の解禁というのもこの当時行われることから、いわゆる「部活」が、ますますジュニア期の競技力向上のために期待されていく状況が出てきます。

それと同時に「社会体育の社会学」、農村や職場、産業にスポーツが広がっていきます。それを体育として見たときにどういう効果があるのか、どういうインパクトがあるのかという、そういう研究が並行して盛んになっていくことになります。

1970年代になりますと、「スポーツ参与の社会学」、すなわちどうやってスポーツにみなさんが参加していくのかという、そういう研究がメインになっています。当時、「スポーツ的社会化」という言葉がよく使われて、国際比較研究も行われています。

1980年代になりますと、さらに「スポーツ意識」を中心とした参加動機、すなわち一般の人たちがいかに地域で、あるいはみんなのスポーツ(Sport for All)という形でスポーツを行っていくのか。ある

いはその後「生涯スポーツ」という言葉も出てきますけれども、そういうスポーツ参加への意識というものが中心テーマになっていきます。

90年代になりますと、今度はマイノリティ、すなわちあまりスポーツに参加していない人たちに対する意識、「対象別スポーツ意識の社会学」と命名しましたがけれども、日頃スポーツに縁のない女性であるとか、高齢者であるとか、障害者等のスポーツマイノリティというものが「みんなのスポーツ」という線上で個別化して出てくる、そういう発想のもとでのテーマが90年代に行われているということです。

少し付け加えますと、1970年代における「参与の社会学」という時代、これはおそらく70年代半ばのオイルショック以降、産業化社会におけるレジャーやスポーツの重要性ということが盛んに言われるわけですが、そこに量的な意識に関する実態調査をふまえて、一体どういうふうには人々はスポーツに参加していくんだらうかということが問題になってくるということです。そこから発展して、今度は「生活の質(QOL)」という概念をふまえて、ただスポーツに参加していればよいということではなくて、そのことがいかに生活の質を向上させていくのかの質的な問題、これとスポーツ参加との関係性を考えたとき「生涯スポーツ」(1990)という言葉が出てきます。これが爆発的に広がるのは、1990年から始まった行政による「生涯スポーツコンベンション」ですね。やはり、研究はこのような政策的な動向に左右されるのですが、「生涯スポーツ」という言葉でもって政策が推進されていくと、この政策用語としての「生涯スポーツ」の登場が、研究にある意味で拍車をかけていくことにもなるわけです。

だから、80年代あたりに、例えば多々納や松村等によって、方法論的な批判というものが展開されます。地域スポーツの社会学っていうのはいったい社会学的研究になってるのかといった問いですね。多々納は理論的な視点から、松村はフィールド調査の視点からそれぞれ批判を行うわけです。いずれにしても、私から見ると、彼らの論点というのは、どうも体育社会学というのは、「スポーツは善いもの」だと最初から決めつけて、そういう体育的な前提から議論を始めてるのではないかということに対する懐疑、疑いということもあつたのではないかと考えます。

2000年代に入りますと、先ほど申し上げたように、「Ⅱ-5 政治、制度、行政、企画、管理、運営、組織、施設」の政治制度云々ですね、この辺の内容が増えてきます【スライド p.9】。細かい数字は後で見ただけであればよいのですが、この背景には2000年9月に出た「スポーツ振興基本計画」、日本で最初にスポーツの基本計画なるものが作られたことと関連しているように考えられます。「スポーツ振興法」が1961年にできていますので、40年ぐらい間が空いて、ようやく基本計画ができた。これは大きなトピックスなわけですから、その基本計画に書いてあつた「総合型地域スポーツクラブ」というキーワードが地域スポーツ研究に影響してきますし、その他「男女共同参画社会基本法」という、いわゆるジェンダーの問題というのも当然研究に影響を及ぼす形になってきます。

これと同時に、「Ⅱ-6 教育、学校、指導、教師」といった学校体育に関連する問題も、この年代に徐々に増えていく傾向がみられます。これは、やはりスポーツ社会学会が1991年に設立されたということを受けて、少しずつその体育学会の中での研究領域として増えてきているということなのかなと思います。

2010年代、最近の10年になりますけれども、先ほど言いましたように、「Ⅱ-5 政治、制度、行政、企画、管理、運営、組織、施設」の問題が急速に下落します。あまり関心と呼ばなくなるわけですね。そしてそれに代わって、「Ⅱ-6 教育、学校、指導、教師」という学校体育の問題が急増してくるということです。皆さんご存じのように「高校運動部員の自死事件」が2012年にありましたけれども、これによる「体罰や暴力の問題」、あるいは部活における「教員の働き方改革」でありますとか、「ハラスメント」などが背景になって、学校体育の問題を社会的に取り上げるということが増えてきました。

それに対して、面白いことに「生涯スポーツ」という用語ですね、このキーワードがだんだんなくなってきているんですね。先ほど 1990 年に政策用語として広がったと言いましたけれども、私に言わせると、どうも今度の「第 3 期スポーツ基本計画」でも、あえて「生涯スポーツ」という言葉を使っていないように思いますし、その用語が政策的に避けられるようになると、だんだん研究の上でも使われなくなるという、そういう傾向も見てとれるのではないかというふうに思われます。

さて、これらの研究傾向を総括しますと、どうも各年代において、やはり最初に卒論で書いた内容とその動向自体は変わらないのではないかと考えてしまいます【スライド p.10】。つまり、歴史社会的な背景によりテーマが規定されている動向に変化はないということです。また、1950 年代に展開された学校体育の問題が再び近年になって「学校体育」（体育授業）や「地域社会」における学校体育（部活の地域展開）といった問題を中心テーマとする回帰現象といいますか、そういう研究動向が見られるというように思います。現在においても、私はそのような傾向が続いているのではないかと考えています。

このように「体育社会学研究」の歩みから体育社会学というものを考えた時、その「知」の生産、あるいは再生産に対して、ある程度我々研究者は自己反省しなければいけない点があるのではないかと【スライド p.10】には、リフレクティブネス (reflectiveness) と書きましたが、通常はリフレクティブティ (reflectivity) と表現する、「反省」ということが必要になってくるように思います。研究というのは、通常因果的な説明を要求しますから、どうしても原因と結果というものを想定しますので、(時系列を逆転させた) 振り返りが多いわけです。ですから、当然社会現象、特にマジョリティの後追いをしがちになる。そうすると、その結果、何が起こるかという、政策を補完するような説明に終始する研究に傾いていくのではないかとということです。言ってしまうと、体育研究者がその「体育人的なパラダイム (体育的価値)」に基づく方法に終始する限界がみてとれるということです。方法論がそこにあるわけではなくて、最初から、ある結論を得るような形での「問い」と「方法」というものが前提としてあるのではないかと。それは体育がどうしても実践性を重んじるあまり、ある種「過剰に実践性を身体化された体育人的パラダイム」(佐伯年詩雄, (2005)「体育社会学研究の半世紀：そのあゆみから、課題を展望する」体育学研究, 50 : 207-217) が、そこに潜んでいるという意味ではないか。これは非常に鋭い指摘だと思います。この「過剰に」というのは、実践性を強調するのは別に悪いことではないのですが、この「過剰に」という意味には、先ほども述べた政策を補完する、政策追隨的な意味での過剰性というものも含まれているのではないかとということです。ですから、こういう研究レビューを通じて言えるのは、研究方法論の問題、すなわち論理に対する自己反省というものがどうしても必要になってくる。その場合、当然自分が何をどう見ているのかという、その見方がどのような背景から成り立っているのか、とか、その研究に参加する自分の立場が対象に対してどのようにインボルブメント (involvement) され、それとどのように距離化、すなわちディタッチメント (detachment) されているのか、という方法論的認識が問題になってきます。エリアスという人は、『参加と距離化』という著書を書いていますけれども、そういう見方、ある種のメタファーが必要になってくるのです。

それとの関連でいえば、これは古くて新しい問題ですけれども、ウェーバーの「価値自由 (Welt freiheit)」という有名な言葉がありますが、この意味は、ある特定の「価値からの自由」だけを指すのではなくて、ある価値から自由になった時に、自らの価値観を意識しながら、では自分はどのような望みしさを選択しているのかに対する自覚(自己反省)の重要性を指摘している言葉でもあります。つまり、研究者自らが関与する「価値への自由」ということに対する研究態度が、ここでは求められているということです。それを考えてみると、やはり体育とスポーツというものの営みに対して、どのように関与し、どのような現象として捉えられるのかについて、もう少し概念的に深く検討してみる必要があるの

ではないかということになります。

Ⅲ. 「体育」と「スポーツ」の近代をめぐる歴史社会学

1. 「体育」という営みと社会～体育からスポーツへ～【スライド p.11】

歴史的に見ますと、「体育」という営みは、実は制度化されなくても、どこにでもある営みだと私は思います。つまり、古代であろうと、中世であろうと、前近代であろうと、そういう営みはあったということです。例えば、地域における生産や労働、あるいは生活に役立つ身体、ここでは「役立つ」ということが大事なんですね。軍事的に役立つ身体、あるいは成人（大人）としての認定に役立つ身体、さらには伝統継承に役立つ身体など諸々です。

ここには手段的な身体観に基づいて、身体や運動への潜在的な教育的機能が求められています。成人の認定をするためには未熟であるか否かとか、あるいは力石や、的当てゲーム、弓射などでは軍事的な意味を持ちます。それから盆踊りにおいては、伝統継承に役立つ身体を作っていくことで、地域共同体のみんなが一致団結していくというような機能を果たすわけです。ですから、あらゆるときやところで、潜在的な教育的機能というものが存在することになります。

前近代における地域共同体は、これらの機能を強制するのではなくて、遊びの中でそういうものを見出そうとするわけです。ところが「遊び」ですから、ついついハメを外します。ハメを外しても前近代の共同体は、肉体的なエネルギーに頼らざるを得ませんので、ある種の「暴力性」をそこで発揮されても、今の我々の目から見ると非常に暴力的だと思うことでも、実は許容するんですね。許していくんです。それが社会に役に立つからという、そういう意味があったと思うんです。つまり、前近代の「遊び」というのは、体育的な機能の中にすでに遊びというものが含まれていて、それがたまたま、ある種ハメを外して、自分たちの暴力性というものを限られた場所と時間の中で発揮していたということです。それは、多少なりとも共同体の生活にとって役に立つということが考えられながら行われてきたということになります。

一方、私たちは「古代ギリシャのスポーツ」とよく言うのですが、古代ギリシャにおいても体育はありました。「ギムナシオン (gymnasium)」というのは有名ですが、ソクラテスもレスリングで身体を鍛えている。その意味は、95%の奴隷に対して 5%の市民しかいなかった古代ギリシャの世界の中で、まさに「市民的教養 (Liberal Arts)」を身につけた市民、物事を決断する市民として、肉体的な教養の側面でもあったわけです。これはおそらく「理想として神の身体 (肉体) に近づく」ことによって、自分はある物事を決断できる人間＝市民、なのだということを証明することにつながったのだと思います。

それに対して、近代体育の「制度」、「教科体育が必修化」された、この成立過程を見ていきますと、これは当然、近代国民国家の成立の中で、国家的な要請として、体育制度が具体的に教科体育として必修化された歴史です。そこには、「富国強兵」「殖産興業」であるとか、「規律訓練」であるとかがあり、その規律訓練がなぜ体育で求められるのかといえば、身体が「可視化」されることにあるわけです。命令したことを聞けたかどうかということの体の動作によってすぐに評価することができるというのが、体育の特徴ですから、規律訓練の目的に役に立つということになります。それが結局は、「富国強兵」や「殖産興業」につながっていく。

この体育制度の成立を世界的なレベルで見ると、デンマークが 1814 年、スウェーデンとドイツが 1842 年、フィンランドが 1866 年、フランスとノルウェーが 1869 年、イギリスが 1870 年、そして

日本は 1886 年なんですね。これを見てみますと、北欧に対してイギリスが案外遅いということが分かります。日本が一番遅いわけですが。なぜ、近代スポーツ発祥の地であるイギリスで体育制度がこれだけ遅れているのかを考える必要があります。また、北欧諸国の場合は、今日の対ロシアとの関係を見てもわかるように、常にロシア帝国との緊張関係が陸続きですからあったことが背景にある。そういう関係から、体育制度の成立は、やはり軍事目的が非常に強いのではないかと考えられます。

そして、(最初に問いかけた) イギリスの場合です。この国は、当然スポーツを重視する伝統があるわけですが、どちらかというところ規律訓練を重視する陸軍に対して、海軍は限られた艦内の行動範囲でしかありませんので、この大海原をどうやって自分たちが方向づけて海路をとって行くのかという環境から、(規律を形成するにしても) どちらかといえば作戦やいろいろなスポーツに似た自由選択というものの方が重要になってくるわけです。つまり、何を選択するのかという多くの機会がある中で、スポーツの自由性というものが尊重される、といったスポーツとのつながりの強さがあるのではないかとというふうにも考えられます。いずれにしても、イギリスの体育は **physical education** ではなく、最初は **physical training** と言っていましたので、体育は労働者階級にとって重要であり、中産階級や上流階級にとってはスポーツ教育が大事なんだということになります。つまり、当時の支配階級であったブルジョワ・エリートにとってのスポーツ教育は、体育とは対比され、むしろ対立するような形で捉えられていたのではないかと考えられるのです。

2. 「スポーツ」という営みと社会 (1) ～近代スポーツからスポーツ教育へ～【スライド p.12】

これをもう少し詳しく見てみますと、ヨーロッパにおいてスポーツという営みは、非常に野蛮なモブフットボールであるとか、クルーエルスポーツであるとかがその原型にあります。先ほど申し上げたとおり、これを「非暴力化」していくことの中に、スポーツが「レジャー化」していく、エリアスの言う「Sportization」が社会発生していくことになります。まさに、**Socio-genetic** (社会発生的) な現象として、社会の非暴力化への指向とともに同時発生する形で、この野蛮なスポーツというものが非暴力化していく。そして、この背景には何があるかというところ、これを説明すると少し長くなってしましますが、簡単に言うと「上流階級の倦怠 (boredom)」がある。

ボアダムというのは、実は労働を強いられるとか、何か肉体労働で強制されるとかということと同等か、それ以上に非常に辛いものであることを、上流階級は身に染みて経験するわけです。そういうものから解放されたいと願い、わざわざ「身体を拘束する」、「身体的な不自由」というものを自ら作り出して、そこから新たな楽しさを生み出す工夫を行おうとする。その工夫がルールというものになるわけですが、その工夫が目的に対して非合理的なルールを作ることに向かうのです。何と言いますか、ラグビーなんかでいうと、前にボールを投げればいいものをわざとどんどん後ろに投げて前へ進んでいくとか、そういう面倒くささですね。その面倒くささっていうのが、実は非常に大事で、そこから楽しさが生み出されることを発見してしまうわけです。そうした「自己拘束」、自分に対する制限とか抑制というものが、これまでの解放される楽しさより、新たにつくられる楽しさとして発見されたのです。それが、結果的には(意図せざる結果として)非常に「公共的な意味」を生み出す契機ともなっていくのではないかとということなのです。

そのようなスポーツの楽しさの継続という目的のために、「狩猟はあえて動物を殺さない」「生かすことによって資源を結果的に確保していく、保護していく」ことに繋がり、「対人間との競争」で言えば、「競争相手の維持とか存続」というものを最優先して、「最大限の安心・安全の確保のためのルール設定」、つまり相手を暴力によって叩きのめさない、怪我をさせないということが生まれてくる。これが、

「楽しさや興奮の探求という『利害状況』から、「意図せざる結果」として、「非暴力化という『理念』が達成されていく社会過程」を生み出していくわけです。つまり、スポーツはそれまでの前近代ではまさに反教育的なものであったものが、制度的に「近代社会に望まれるライフスタイル（理念）と一致する」ことにより、ついにはイギリスのパブリックスクールにおいて **athleticism** というスポーツ思想を生み出すことにもなります。この思想では、とにかくスポーツにおいて勝利をめざして競争しさえすれば、教育的な価値が生まれ、社会的に正当化されるという考え方が示されます。こうしてスポーツは、教育に取り込まれ、教育的思想を体現する強固なツールになっていくというわけです。

2. 「スポーツ」という営みと社会 (2) ～近代スポーツからスポーツ教育へ～【スライド p.13】

ところが、いったん制度化されると、**athleticism** は大変大きな弊害を生み出すこととなります。ただ功罪の「功」、プラスの面としては、課外活動としての学校スポーツの普及振興に貢献する側面があげられます。

しかし、マイナス面としては、スポーツが教育の手段として位置づけられ、制度化されると、個人にとっては「スポーツ嫌い」が発生し、強制されてやるのは嫌だという人々（子どもたち）を増やす結果となる。また、逆に熱中し過ぎて他の学業が疎かになる弊害も出てきます。

そして、集団的には学校の名誉に結びつくような結果至上主義、我々はこれを「勝利至上主義」という言い方をしていますが、勝たないと自分たちの学校の名誉というのは保てないんだ、というような集団主義が国家主義につながり、このような集団主義イデオロギーがいろいろなところに広がっていく要因となります。

つまり、かつてだったら **Leisure** としてのスポーツといった内在的な価値が非暴力化を生み出していくようなプロセスに対して、外在的な価値が強調されると、結果的にはスポーツが再暴力化していく。つまり、現代から見れば「非公共性化」していくというパラドックスを生み出していくということになるのです。集団的な価値を外在的に強調するのは、「政治・経済・社会・観衆・アントラージュ等」であり、そうしたところから当事者に対する圧力、プレッシャー、あるいはパワーが発揮されるわけです。

もう一度、先ほど見たスポーツの定義を見てみますと、元々スポーツは **Leisure** としてのスポーツが起点であったと考えれば、「教育としてのスポーツ」は、主に学校がそれを引き受ける訳ですが、これはあくまで外延的なものなのです。スポーツのデノテーション的な現象として見ることができます。

また、もう一方のチャンピオンシップ・スポーツにおいては、社会の側が誰が1番か、2番なのかを決めたがる目的が他に存在するわけです。教育としてのスポーツは、そのようなチャンピオンシップ・スポーツに結びついていくこととなります。

この教育とチャンピオンシップ・スポーツが結びついたものが、運動部活動であり、それが競技大会で優勝するためにスポーツの高度化をめざし、自分たちの戦いにおいて、結果を求めることが教育的に意義のあることだ、鍛えられるのだとか、あるいは子どもはそれで成長していくんだというような教育的意義や効果を強調するわけです。高度化を目指すことは、ある意味でのヒエラルキー、正三角形（ピラミッド）を作って、それによる教育的効果が参加者全員に自然な形で生み出されるはずだという信念に基づいています。トリクルダウン（しずく）効果というのでしょうか、そういうものに繋がっていく。私は、このような信念に支えられた合意形成、それはある種、教育の範囲内でしか認められない公共性ということから、スポーツに付与される「教育的公共性」と称するものだろうと思っています。日本の場合には、特に部活におけるスポーツについては、そのような捉え方がなされることが多いのではないのでしょうか。

それに対して、Leisure としてのスポーツというのはあくまで、もちろんその中には広い意味で教育的な機能もありますし、あってもよいのですが、どちらかと言えば市民がスポーツそれ自体を楽しみ、憩うような、つまりそれが何か教育的に意義があるとかないとか、そんなこととは関係なく、ただ楽しいからやるんですよというような、そういう「市民的な公共性」というようなものをベースにした見方ではないかと思うわけです。

3. 体育社会学における「体育」と「スポーツ」の概念関係～「現象」から「概念」への方法論的探求～ 【スライド p.14】

これらをまとめ、体育社会学における「体育」と「スポーツ」の概念関係を方法論的に見たときに、現象から体育とスポーツを捉えると、戦前の日本というのは体育という制度ができて、そこにスポーツというものを取り込んできました。まさに、スポーツを体育的に、体育として扱ってきた。これに対して、戦後の日本は、少しずつ体育が社会体育という形で外に連れ出される一方で、それがチャンピオンシップ・スポーツの下部構造（底辺）として捉えられるようになる。日本の学校体育の場合には、部活動というものを通じてその基礎を強固にしていくわけですね。そして、どちらかという社会体育の方は市民スポーツとして自立していく中でチャンピオンシップ・スポーツとは対立するか、あるいは別の現象として見られていく。この社会体育の社会への広がり、社会学は「コミュニティ・スポーツ」とか、「みんなのスポーツ」とか、「生涯スポーツ」という形で捉えてきました。

つまり、そういう中で、「体育社会学」と「スポーツ社会学」は、体育とスポーツをどうも現象として切り分けている、そういう傾向が見られるのではないかということです。そして、それが「体育社会学」と「スポーツ社会学」という形で、学問的な切り分け方がなされる一つの大きな動機になっているのではないかと考えます。

それに対して、「体育」と「スポーツ」の概念から見ていくと、そもそも今の現象というのは、「スポーツ」という概念の大きな広がりの中で、つまりプレイ/レジャーですね、その中でスポーツというのが誕生してきて、これが近代スポーツに発展していくわけですが、スポーツ教育としての体育は、そのスポーツの中に教育的な価値を見出し、そこに含まれていくという関係になります。

それに対して、日本の場合には、あくまで体育の概念からスポーツを見るというような、非常に大きく、強固な視点があるわけです。いろいろなスポーツ行動は、どうも体育で慣らされたハビトゥスというものが反映しているのではないかと見たときに、「体育」と「スポーツ」は単純に切り分けられるものではなく、相互に関係していると捉えられます。したがって、「スポーツ」から「体育」を見たときには、当然ながら体育は批判されるでしょうし、「体育」から「スポーツ」を見た時には、スポーツ現象の中で様々なチャンピオンシップ・スポーツにおいて体罰や暴力があるというのは、ある種体育的な現象としてみられ、その影響力が非常に強いのではないかという見方が出てくると思うわけです。

だから私は、体育社会学という学問領域が、そういう意味で、スポーツ社会学とやはり相互にきちんと問題の立て方を概念的に切り分けていくことによって、様々なある種の交流といいますか、関係性というものが、体育人だからこそ、体育学だからこそ見えてくるのではないかと考えるのです。その体育の影響力についてあまり意識できない方たちは、スポーツを体育と切り離された純粋な文化という形で見ていくのだろうと思うんですけど、そうではない現象というのは、現実にはまだまだ（日本の場合）多くあるのではないのでしょうか。

IV. これからの体育社会学に問われているもの (1) 【スライド p.15～16】

1. 「文化」化と「制度」化からの概念的アプローチ【スライド p.15～16】

「文化」化と「制度」化から見ていくと、「スポーツが文化になる（文化として認識される）ためには」何が必要かという点、「スポーツの原型としての運動遊び」が出発点になります。「競争的な営み」、これは動物でもやると思うんですが、遊びは「自然発生的な営み」であって、「自発的な営み」であるということなんです。ただ、これだけではスポーツとしては認識されませんし、記録もされません。何が必要かという点、このような遊びが「人々に広く支持される営み」でないといけないんだということです。これが「『文化』になる」ということです。

そして、この文化としての遊びが広く社会的に承認されると、これが「制度」になるということですね。つまり、そこには「文明と社会の発展が一つの条件」として必要になってくる。ですから、私たちは歴史を描くときに、やはり「古代ギリシャ時代のスポーツ」からスポーツの歴史を紐解く見方をするのでしょうか。スポーツというのは、図（p.15）にあるように、「観念的な文化」「行動文化」「物質文化」によって成り立ち、それらの各要素が社会とさまざまな歴史的な関係を持ちます。

では、「『体育』が文化になるとは」どういうことでしょうか。これは佐伯（聰夫。後に、年詩雄）氏が言っていることですが、制度側から見た「体育」は制度的な制度です【スライド p.16】。身体や運動文化に対する教育的な規定、つまり教育的意義があるからそれらを取り上げ、制度的に細分化し、枝分かたせさせていく。これをガース&ミルズという言葉でいうと **ramification**、分岐という言い方になりますけれども、そういう制度的な特徴がある。一方、スポーツはあくまで「自然成長的な制度」で、プレイを中核にして、それをゲーム化したり、様々な工夫をして「運動への自発的なプレイ欲求」をベースにしながらか、それが「非暴力化」して「文明化されていく」ことで、「近代スポーツ」として認められていきます。その中には教育的な性格が認められるので、それをスポーツ教育という形で課外活動という形で展開していく。体育のような静態的でトップダウン的な制度ではなく、あくまでプレイ欲求の自然成長的な展開の結果としてスポーツ教育という形で発展していくケースも出てくるということになります。

2. 体育社会学研究の認識論的パラダイムをめぐる課題【スライド p.16】

したがって、「体育社会学研究の認識論的なパラダイム」をめぐる課題として、その「文化」化や「制度」化の観点から見ていくと、今まで申し上げたような「体育とスポーツの成立過程」に関してどのような共通性、異質性が日本や他の国にあるのか、そういう国際比較を行うことが一つ考えられます。その中で、日本の体育の問題からスポーツの問題へと発展させて考えるということですね。

それは当然、その共通性、異質性から導かれるわけですから、「現代における運動への意味や価値がどのような形成のされ方をしているのか、作られ方をしているのか、その特徴とは一体何なのか」という課題に発展していくことになります。

そしてそこをベースにした時に、「来るべき社会に求められる体育から見たスポーツのビジョン化」ができるのではないかと。つまり、先ほど申し上げた現象に追随するようなスポーツの捉え方ではなくて、これまでの過去を振り返り、その概念関係を見ながら、これからの「スポーツ」というものが「体育」との関係において、どのようにビジョン化される必要があるのかということ、私たちはやはり考えていく必要がある。例えばですね、ここ【スライド p.16】に書きましたけれども、「スポーツの高度競技化、高度競技制度化に果たす体育人的パラダイムの功罪」に基づく先見的な課題とは何か、や「体育社会学から見た体育とスポーツをめぐる公共性とは一体何なのか」、そこにこれから起こりえるどのような課題が展望できるのかなどが考えられます。先程、体育的公共性と市民的公共性について、お話ししまし

たが、もっとそれを突っ込んで議論していく必要があるのではないかと思います。井上俊氏が「公共社会学」のお話をされた際、体育社会学は公共社会学として成立するのではないかと問われましたが、そういう意味では、社会的な課題を先取りしていく「政策社会学」としても捉えられる研究になるのではないかと、そういうことにつながっていくのではないかと思うわけです。

V. エピローグ：体育社会学からみた学校体育の再帰的課題【スライド p.17～18】

1. 学校体育問題への回帰と体育社会学（社会運動論）【スライド p.17】

最後に、体育社会学から見た学校体育の再帰的課題について考えてみたいと思います。「再帰的」というのは、(先ほど申し上げたように) リフレクティブィティのことですから、もう一度、学校体育の問題に立ち返って体育社会学を考えたときに、どんなふうな見方ができるのかということです。

ところで、戦後の学校体育改革に向けた民間体育研究団体は、体育社会学と大変強い関係がありました。一番関係が強かったのは、全国体育学習研究会（通称「全体研」）における先ほど述べた体育の小集団（small group）研究から「楽しい体育」論への流れです。他方では、考え方は違いますが、学校体育研究同志会、通称「同志会」が「集団づくり研究から運動文化論」を発展させていく研究がありました。そしてもう1つは、これはまだ研究の余地があると思いますが、中森孜郎らが中心になって、教育科学研究会「身体と教育」部会の中で、「からだ育て」であるとか「からだの教育」というものから身体表現や民舞の探求を行っていった流れがあります。

こういう体育に対する、ある意味で社会学的な研究成果が学校体育の現場に対して、いわゆる制度化されたトップダウン的な実践ではなく、ボトムアップ的に、実践的なアプローチとして芽生えているわけです。これをどういうふうに我々は引き受けていくのか、ということが体育社会学が、現代の学校体育問題を研究する場合に非常に重要になってくるのではないかと思います。例えば、学校において今非常に騒がしい「部活動の問題」、これは働き方改革というところから問題提起されていますけれども、当然「体育教師論」であるとか、さらに言えばスポーツ「クラブ」論ですね、クラブというのは本来どういふものであるのかということの問題点や課題を究明していく上で、部活のあり方というものを考えていくという流れや実践的なムーブメントが考えられます。

それから「ハラスメント問題」。これは「体育と暴力」の問題ですが、今の話からすれば、これは「前近代への回帰か？」と【スライド p.17】には書いていますが、いわゆるポスト・スポーツではなくて、むしろ体育によるプレ（前近代的な）・スポーツの状況に戻っている（回帰している）きわめて皮肉な現象ではないのかという問いも生まれてきます。

それから、体育における「社会的格差問題」ですね。これは当然、「体力」だとか「運動技能」、「スポーツ参加」であるとか、「ジェンダー」の問題等々をはらんでいて、今後さらに格差が広がっていくと予見されるのであれば、これを体育は助長しているのか、あるいはどのように修正しようとしているのか、といったことも含めて、体育社会学がどのような先見的な課題を設定することができるのが試されているのではないのでしょうか。

このように歴史的に見ると、「戦後学校体育への社会学的なアプローチ」というのは、「その実践的な成果」を生み出してきたと評価されるわけですが、まだまだそれは現在において「未成熟」な状態にあるのではないかと思います。制度化された体育を、もっと体育社会学的なレベルや視点で、課題化し修正し、さらには解体して新たな制度的ビジョンを創造していくといいますが、そういうことを含めて、その目標は（特に、社会運動論の立場からは）まだまだ達成されていないのではないかとこのように

に思えるわけです。

2. 「体育の社会的構造」(竹之下, 1972, p.45 改変) に基づく再考【スライド p.18】

最後に、こういう問題を考える際、竹之下休蔵氏が 1972 年に示した「体育の社会的構造」が我々の非常に大きなよすがとして、研究をしていくときのフレームワークになるのではないかと考えます。もう時間が来ていますので、細かいお話はしませんけれども、体育科教育はどうしても図の点線の中の要素を見るわけですね。いわゆる体育授業というレベルです。しかし、社会学は、その体育授業がどういう子どもたちの集まりなのか、すなわちその家族の背景にどういう集团的、あるいは階級的・階層的な特徴があるのか、そしてその背景を作り出す社会というのはどういう社会なのかということの問題にします。そして、学校は子どもたちをまさにスポーツに参加させていくわけですが、それはどういうこと(きっかけや動機等)によって、どういう社会的特徴をもった子どもたちがどういうスポーツを受け入れて、それを結果的に社会に還元したり、消滅させたりしていくのか。

そうしたスポーツに関連した文化や集団というものの特徴を学校体育は陰に陽に、地殻変動のような形で、生み出していくわけですね。それが我々が望んだような形に変化していかないとすれば、そこに何があるのかということをやはりもっと深く追求していく必要があると思います。当然、体育授業は学校というところで行われていますので、その学校が教育委員会や今の文部科学省ですね、まさに行政との関係でどう動いているのかということも含めて、考えていくことが必要です。それは大きな社会変動の中で動き、方向付けられていきますから、これらの変動を体育社会学がある意味で予知的に、それらをビジョン化し、先に先に、その問題を提起していく。そういうことが研究のミッションとしてあるのではないかということです。

大変早口で、本当はもっと細かい話をすべきなのですが、内容としてはこれくらいにしておきたいと思います。私は、専門領域の代表だった時に、今の日本体育・スポーツ・健康学会の「体育スポーツ科学情報コラム」というところにコラムを載せております【スライド p.19 に URL を掲載】。もし関心のある方はぜひ読んでいただければと思います。2017 年に書いていますので、高峰さんかまた別の方でも構いませんけれども、新たな体育社会学のミッションというものを書き起こしていただければというふうに思っています。

主要な参考文献は、そこに書いておきました。【スライド p.19】

どうもご清聴ありがとうございました。以上です。よろしく申し上げます。

【フリーディスカッション】

清水：菊先生、ありがとうございました。改めて体育社会学という学問の意味が非常によくわかったと思います。体育社会学は、学校体育研究にとどまらず、スポーツを考える際に重要なキーワードがあるというふうに言われ、スポーツと体育の概念、その概念の差異から、スポーツと体育を見ていくと様々なことが分かるという非常に深い話をしていただきました。若い人たちにとっては、体育社会学はこういう可能性を持った学問なんだなというのが非常によくわかったことと思います。

これから議論に入りたいと思いますが、コメントや質問がおありの方は所属などを言っていただいから、ご発言のほどお願いします。

岡田：最近、国際スポーツ社会学などで、スポーツコーチングの社会学みたいなものを報告したりしているのですが、その際、国際的なスポーツ社会学において、いわゆる学校教育というか、スポーツ教育

みたいなものは、スポーツ社会学のメインアリーナではないというような理解を示されたことがあって、非常にショックを受けています。ただ、考えてみたらですね、今日、菊先生がお話しされたように、日本の、ある種地域特殊的な要素として、いわゆる体育社会学が小集団研究や、そういった領域の調査研究から始まったのは、非常に日本独自の展開だったことに気づかされました。それで、体育社会学を勉強しなきゃいけないと思って、参加させていただいて聞いてるんですけど、菊先生に伺いたいのはですね、1950年代は、いわゆるパーソンズの構造機能主義があつて、その後その影響で、ベールズが相互作用分析といった小集団研究の基本的枠組みを提示した。そういう中で、体育社会学の調査研究が隆盛したんじゃないかと思うんですけど。その後、現代になると、いわゆるスポーツ的なものとのせめぎ合いの中で、体育社会学がその概念を喪失した。つまり、体育という、いわゆる場の概念としての学校と、機能概念としての教育の幸せな結婚として、学校体育社会学があると。それが何か概念喪失をしてしまったというふうにも読めるのですが。

で、質問はですね、これからのスポーツ社会学と体育社会学において、それぞれ考えていく際の基本的な研究パラダイムに相違があるのかどうなのか。つまり、例えば、体育社会学の場合には、いわゆるその小集団研究的な分析みたいなものが、もう一回見直されるべきと思います。ですが、研究パラダイムという点から見てのスポーツ社会学と体育社会学の差異みたいなものをどのようにお考えになっているのか、について伺いたいです。

菊：ド直球の質問で大変ありがたい、うれしい質問だと思うんですけど。基本的に、制度化された体育を論じる場合には、構造-機能主義が最もびつたりきますね。ですから、岡田さんがおっしゃるように、構造-機能主義それ自体は50年代や60年代に体育社会学の中で意識されていたのかというと、そうでもないんですね。けれども後追いで、やっぱり70年代、80年代になってようやく意識され、出てくるんですね、体育社会学の場合には。それを理論化したのは、九州大学の多々納秀雄氏であるとか、あとは山本清祥氏ですよね。ただ、両氏の議論はあまりにも理論的なところに傾注しすぎてしまって、やはり現場サイドといいますか、体育人的なパラダイムからはあまり受け付けられず、議論が深まらなかったと思っています。

だから本当は、構造-機能主義的な視点で研究を行っていたのだけでも、その説明概念それ自体が不十分であったという、そこが私はある意味で不幸だったのではないかと思うんです。幸福な結婚とおっしゃったけれども、実は体育社会学にとっては（そういう意味では）ちょっと不幸で。だから、理論と実践というように、何かそういうものに切り裂かれてしまって理論的な課題が十分に深められなかったということなんですね。岡田さんがやっておられるエスノメソドロジーは、そこをうまく掬い取っているんだろうなというふうに私は見えます。

で、研究パラダイムについて、国際的にはヨーロッパにおいて、学校のスポーツ教育というのはメインのアリーナではないというのもその通りだと思います。それは、研究者の立ち位置が違うからですね。なぜ彼らが論争するのかというと、職的基盤というものが自由だからです。いわゆる体育学という職的基盤を持つ日本の体育社会学者の身体というのは、（問いの立て方やテーマ設定）においてその基盤を守ろうとする癖が出てきますね。やはり、どうしてもスポーツ教育というものに依拠しながらスポーツを見ていく。教育的な概念としてそれを見ていくということなのだろうなと思います。

スポーツ社会学の研究パラダイムは、今でもかなり多様化していると私は思うんですけども、何がいいとか悪いとかというのは目的や、その研究者の価値観によるのだろうと思うんですね。何を明らかにしたいのかや言えることは、360度すべてを網羅することはできませんので、それぞれがそれぞれ

の研究関心の中で、大事なのは何を目的にし、何を明らかにしたいのか、ということを確認にすることに傾注します。そのためには、理論を意識して、それに基づいてどういう方法論をとった方がいいのか、妥当なのか。やはり可能性と限界を常に意識して、自由に議論した方がいいですね。

スポーツ社会学については、そこに重要性が置かれているような気がします。では、体育社会学者が、そのスポーツ科学に対して、その重要性をいかに広げられるのか。これは岡田さんたちがやっている研究でも、かなりその突破口が開かれる可能性があるのではないかと考えています。ただそこにおいて、やはり例えば岡田さんたちがやってるようなメソッド、ロジックについて、研究方法論としてもっと体育に応用されていくようにならないのか、現場に応用されてから研究者が応用していくのでしょうか、もっともっと広げていきたいと思った時に、何がそれを阻んでいるのかという問題がありますね。そうしたところで、これまで体育社会学が行ってきた研究の内容だとかテーマというのは、いろいろな意味で反面教師でもあるだろうという気がします。研究の現状がこのようなので、どのパラダイムが主流になっているのかというと、私の方も確定はできないように思います。ただ、体育社会学は構造-機能主義と非常に親密な関係にあるんだけど、そこを徹底できなかったというのは非常にある意味で、体育社会学の限界と言いますか、日本の場合にはそこに限界があって、いまだに新たな研究パラダイムのための自己反省（リフレクティビティ）が不十分な状態にあるんだろうなという気はしています。お答えになってますかね。

岡田：ありがとうございます。私がスポーツ社会学に参加した頃、ご活躍されていた森川貞夫先生は、「我々はパーソンズに騙されたんだよ。騙されたんだけど、君たちがやっていることはパーソンズと同じように私達を騙すかもしれないので、私は警戒してるよ」という風に言われたことは面白かったのですが。私達は、いわゆる「スポーツコーチングの社会学」みたいなことをやろうとしているんです。これは先生のお話からすると、いわゆる我々の持つてくる体育人としての身体性を使うと、体育社会学の一つの領域として成立するというか、展開していった方がいい領域というふうに考えてよろしいのですね。

菊：岡田さん、例えばコーチング、今コーチング学っていうのがありますよね。この専門領域の名前は体育方法学から変わりましたね。私はいつも、コーチング学をやっている人に、「ティーチング」と「コーチング」の違いって何なんですか？と問いかけるんですが、そのようなことは未だに書いてないんですね。そこらへんはおそらく、岡田さんは答えられるんじゃないかなと私は思うんですけど、そういうことも含めて、体育社会学における可能性というのはあるのではないのでしょうか。

で、何かを対立させるというよりは、やっぱりこれまでのハビトゥス的な見方というものをどこから解体していったら、どういうふうにソフトランディングさせていったら広まっていくのか。もっと受け入れられるようになるのかという、そこら辺のストラテジーの問題もあると思うんですよね。

岡田：ありがとうございます。たくさん答えていただいて、ありがとうございました。

清水：はい、ありがとうございました。谷口先生、お願いします。

谷口：先生、大変勉強になりました。今の岡田先生の後半の質問に、私は大変興味深く伺いました。菊先生だからお聞きしたいことがありまして、先生、社会学とはいかなる学問なんですか。改めて今

日のお話をお聞きして、そのことを問わせていただきたいと思うに至りました。というのは、スライドの中で佐伯先生がおっしゃったという「過剰に実践性を身体化された体育人的パラダイム」という言葉があったんですけども、それを病床にあった荒井貞光先生がですね、「最後のゼミになると思うんだけどさあ」と仰ってお話をいただいた時に、「佐伯さんはこんなこと言ってんだけどさ」って言われて。正直に言うと、社会学に対する劣等感満載っていうか、むしろこれでいいんじゃないのかなと。過剰に実践性を身体化される体育の人間だからこそ、知り得ている実践知であったりとか、経験値であったりとかというものを社会学のフレームにしていく。新しい社会学のフレームを作っていくということにこそ、我々の使命というのがあるしはないのか。そんな風に思ってるんだけどさ、谷口君、それをぜひ体現してほしいよ、というようなことを言われて、ずっと私は胸の中に留めているつもりなんです。だからこそ、今日、体育社会学の役割というのがすごくよく分かったような気がします。それとともに、やっぱりお聞きしたいなと思ったのが、先生、社会学という学問はいかなるものなのかということ先生からお教えいただきたいという思いに至りました。よろしいでしょうか。

菊:とても難しいですね。それは社会学者が100人いたら、100通りの答えが出てくるとは思いますけど。そもそも社会学史を少し紐解いていくと、社会学というのはご存じのように人間が、いわゆる前近代の共同体から解き放たれて、自由な個人となった時に、いかにその社会というものを構成するのか。つまり、共同体イコール社会、非常に行動範囲が狭い社会であったもの、つまりそこでは社会という概念が必要ないわけですね。そこには家族があり、その地域の人たちが社会としてあって、具体性があるわけです。かなり具体的に見えるわけですね、可視化されてるわけです。ですから、お互いに乱暴な言葉も使うし、ある程度暴力的な行為もできるわけですね、許容されるわけです。

ところが、見知らぬ誰それかわからない。ただ、この人は人間であるということはわかるんだけど、何者かわからないところに自分がいたときに、当然、その都市というのは、そういう社会をつくるわけです。そのときに、何を自分は縁にすればいいのかと。何をもち、その人間を見ればいいのかと言ったときに、自分と同じ思いをしたり、同じ考えを持ってる「はず」だと思うしかないんですよね。私は暴力を振るわない。だけど、あなたも暴力を振るわないはずだよ。でなければ、外へ出られないわけですよ。つまり、社会学というのは、まさに秩序の学問であるというのは、そういうことなんだろうと思うんです。新たな秩序というものをいわゆる「コミュニティ」から「アソシエーション」へとか、「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」へとかと言って、そういう社会の概念の広がりというのは、やはり個人にとって、その社会とは何なのかという問いかけでもあると思うんです。ですので、社会学そのものは、やっぱり近代社会という、その社会的な特徴から生まれてこざるを得なかった学問なんだろうと思うわけです。

その時に、常に問題なのは、私は谷口さんという人をよくよく知っているというか、知っていますので、こういったらこんなこと言ってくれるんだろうとか。決して暴力をふるう人じゃないんだという最低限の会話ができる関係ではあると思うんだけど、それが見知らぬ人がなぜ自分に対して暴力を振るわないのかということを確認することはできないんです。ええ、常に「そうかもしれない」という世界ですよ。だけど自分は、見知らぬ人同士の中でも、そこで生きていられる、行動ができる。近代以降の社会というのは、言ってしまうと「根拠のない信頼」によって成立してるわけです。つまり、根拠のなさというものをいかに社会学がフォローするのかということなんだろうと。だから、社会学というのは、やはりさっきの話じゃないけれども、構造一機能主義的なものがどうしても最初に、特にアメリカでそういうものが生まれてくるというのは、僕はわかるような気がするんですね。その社会の背景の中

で、学問が成立するとすると、今の荒井先生のお話も非常に僕にとっても参考になったんだけど、要するにですね、体育人だからこそ過剰な体育人的パラダイムを持ってるからこそ、逆にそれを自覚化することが重要で、そのためにはやはり対比することが必要で、その対比するものの中に、多分荒井先生の場合には佐伯先生がいたんだろうなと思うんです。そして、それによって自らの立ち位置というものの特徴を見出ししていく。何もないところからは、自分たちの特徴は見えませんよね。学問的なパラダイムを形成していく上で、そこは非常に重要で、だから学会というものがあって、様々な意見交換をやって、その中で自分が何かに染まるということではなく、またこれに従うということではなくて、常に100人いたら100人の研究者が自律的に、それを受けたり拒否したりして、自分のパラダイムを作っていくということでしょうか。そのことが例えば最終的にはですね、荒井先生が言っているような体育人的パラダイムだからこそ、できることが見出せるという言い方になるのではないかと。

僕はスポーツ社会学会ができた時に、ご存知のようにスポーツ社会学の重鎮のような人たち、例えば社会学会の会長職に就いたような研究者が入ってきた時に、これは他の体育学の独立学会とは違うなと思ったんですよ。どうしてかということ、我々は比較ができるわけで、そこでつまり社会学に恐れおののくのではなくて、社会学の人たちはスポーツをどう見ているのかということと同時に、私たちがそれによってどう逆照射されるのかということですね。向こうからすると、井上先生ともちょっと話したことがあるんですが、なぜ入ってきたかっていうと、それは人に頼まれたからということはもちろんあるんだけど、体育の人たちはスポーツをどう見ているのか、どんな風に研究しているのかということにすごく興味があったっていうんですよね。そこに独自のパラダイム性を見出すための、相互交流が生まれるのだろうと思いました。それを見透かした上で、おそらく荒井先生は(スポーツ社会学とは異なる)体育社会学には体育社会学の道があるんだというような、そういう宣言をされたんだろうなという気がするんです。否定の否定による肯定ですよ、はい。そんな風に考えます。

谷口：ありがとうございました。

清水：はい、ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。今日のお話からいろいろヒントもあったと思います。はい、どうぞ。

日向：日向と申します。先生、本日は貴重なお話を伺いまして、ありがとうございました。これまで体育社会学系の方の学会とかには参加したことがなかったので、初めて聞く話でしたが、たくさんの学びを得られて、これを持って帰ろうかなという気持ちでおります。それで、質問というか、先ほどの岡田先生との議論を伺っていて、ちょっと気になったことなのですが、エスノメソドロジーが体育社会学にもし入っていないとすれば、その理由はまさに体育人的パラダイムなんじゃないかな、とちょっと感じてしまっていて。というのも、私は社会学専門ではないんですけども、社会学の認識をある者の外部性、外部に行くことで外部から発信する、発信することだという認識でおりました、例えるならフェミニズム研究に対するクイアスタディーズみたいなものと認識しておりました。フェミニズム研究であれば、男性優位社会に発信するということによって社会学になり、クイアスタディーズというのは多分フェミニズム研究の中で発信することに意味があるようなものと認識しています。したがって、体育人パラダイムの人々が体育を見てしまうと、社会学としてはできないのじゃないのかなということを感じておりました、そうした認識論といいますか、体育人が体育を見る、スポーツを見るからこそ、体育社会学、特に体育社会学の方が顕著だと思うのですけれども、もしかしたら社会学として方法論の

中にエスノメソドロジーみたいなものが入ってこないのではないかなと思ったんです。ちょっと見解を伺いたいなと思ひまして。

菊：今まさにおっしゃったように、社会学理論に対してどう向き合うかということなんですね。体育人的パラダイムというのは、要するに調査さえしていれば、何か社会で起こった出来事をトレースすれば、何となく論文になったような気になると言ひますか、そういうことに対する課題が70年代、80年代に起きるわけですね。そして、一方では理論的な、今おっしゃったように理論的なことを意識して、それが本当に適合するかどうか、それがちゃんと説明されているかどうか、社会との接続がきちんと行われているかどうか、そういうことをしっかりと理解していく必要があるんだと言うことと同時に、フィールドワーカーからすると、ただ単に調査する、つまり紙を配って量的に傾向を見たって意味がないよというような批判ですね。それはペーパーを量産するだけの道具であって、つまり社会的基盤、体育人が体育実技と体育理論という大学体育の中で教養として、つまり「パンキョー」と言われる一般体育が科目化されていて、必修化されたからそれにおもねっているだけなんだという、そういう自己批判というのがあったわけですね。そこから、幸か不幸か体育は必修から外されるわけですね。1993年の大学設置基準の大綱化以降のことですけれども、そうした時にやはり研究としての真価が問われる。そういう不安定な状況だからこそ逆に、いろんな人に、自分たちだけに通用する言葉ではなくて、もっと言えば、社会との関係、体育やスポーツに関連している、例えば今おっしゃったような様々なマイノリティの人たちに対して、どういうアクセスを自分たちはしているのかとか。どういう問題提起ができるのかなど、そうしたところから、もっと自分たちの研究していることに対して批判する、自己批判していくというようなことも含めて議論ができるようになってきているのではないかと思ひます。

だから、さっきの岡田さんによるエスノメソドロジーの話は一つの例ですけれども、いろいろな分野から体育社会学に入ってくるということも大事なんだろうと。なぜかという、先ほどもお話ししたように、概念的にはですね、やはり日本のスポーツ現象というのは、体育、何だかんだ言っても体育に規定されているんですね。その現実をどう解体していくのか、そしてそれをどのように、どういう方向に向かつて再構成、再構築していくのか、ということです。様々な方法論によって、議論していかなければならない課題があるのだと思ひます。お答えになってますでしょうか。ありがとうございます。

日向：はい。私は、もともと教育学なので、何か同じようなことになりがちな感覚があるので、ある種非常に相対化して見ることができたというか、よく反省できたというふうに思ひます。やはり、同じような課題を背負っていると思ひます。

もう1点、質問なんですけれども、もし先生ご自身がこれからエスノメソドロジーをやるとするならば、どういうフィールドに入ったら新しい研究とか方向性が生まれるか、仮説的に少し伺えればと思ひます。

菊：それは岡田さんに聞いた方がいいんじゃないかと思ひますけどね。

日向：体育社会学者が社会学として研究できるフィールド、これから発信していける、あるいは探求して新しい価値を生み出せるようなフィールドについて、何かしら示唆をいただけたらうれしいなと。

菊：例えば、さっき岡田さんはチャンピオンシップ・スポーツのスポーツコーチングの話をしてましたけ

ども、さっき私は「コーチング」と「ティーチング」の違いって何なのでしょうかねと言いました。エスノメソドロロジーの方法論からいうと、同じ言葉でもティーチングとコーチングにおける言葉だとか動作だとか、あるいは方向性、導き方だとか、それは当然違ってくると思うんですね。それは教育の中で営まれる言葉のやりとりであるとか、そういう違いの中で具体的に論証されていくのではないかと思うんです。

ある意味でティーチングという営みの中にいろいろな言い方がされていますよね。指導じゃなくて支援が大事なんだとか、そういう単純な2項対立ではなく、そこでもっときめ細かな議論ができるのではないかと思いますけどね。学校現場でも、エスノメソドロロジーの方法論というのは非常に有効な議論になり得ると思います。ただ一方で、やっぱりエスノメソドロロジーのいろいろな可能性と限界、限界のようなものもね、当然そこからは議論されると思いますので、そこはやはり学問として、論争していった方がいいのではないかと思います。

日向：ありがとうございます。コーチングという言葉は、教育学の方では一切聞いたことがなかったので、不思議な感覚がして、先生がおっしゃっていただいたことは、研究の方向としてかなりあり得るなというか、説得力があるなというのをとても感じました。いくつも質問させていただいて、ありがとうございました。

菊：はい、ありがとうございました。

清水：ありがとうございました。その他いかがですか。菊先生、今日のお話で体育が非常に生活に密接であるということから概念定義をして、いろいろと考えられるわけなんですけど、今ちょうど政策的には全部「体育」から「スポーツ」になっているという状況にあります。日本体育協会から日本スポーツ協会になりましたし、そういう政策としてのスポーツへの変化というものに対して、体育社会学というところからどのようなことを批判的に言うことができるのか、非常に広い視点ですけれども、どのようにお考えでしょうか。

菊：はい。今の御指摘、大変重要だと思うんですね。先ほど「生涯スポーツ」という用語が最近あまり使われなくなったと言いました。研究のレベルでもあまり使われてないような印象を受けるのですが、これはやはり研究自体が政策用語に振り回されてるんじゃないかと思うんですね。本来、生涯スポーツとは一体何なのか？もっと研究のレベルでね。概念的なレベルでもそうですが、探求していかなければいけない議論だと思うんです。例えば、「体育」から「スポーツ」へという動きが、人々の生活感覚としてはこれから目指す方向として非常に重要なんだという、ある種の理念的なレベルでの議論をどうやってその理念に近づけるような方向性で議論していくのか。

そのためには、様々な利害状況があるわけですよね。だから、体育というものが持っていたその利害状況が、スポーツということになると、どう変わっていくのか。制度的にも、組織的にも、変化していくことによって、何が切り取られて、何がこう膨らんでいくのかというところ。そしてその体育的な状況が、ある意味でスポーツという名前に隠れて、非常に何かインサイダー的な、隠れた機能になっていく、そういうものとして沈み込んでいく、そういう可能性もあるわけですよね。そうすると社会学というのは、それをいち早く見出していく、ディスカバーしていくことによって、そこでの接続の問題であるとか、逆に体育にとっても、やはりスポーツの現状から見て、もう少し体育で培われたこういうとこ

ろを重視していかなければいけないのではないかと、という議論も当然出てきますね。だから、ある種、概念的にみた体育とスポーツの弁証法的な議論というものが、体育社会学には求められるのではないかと、というふうに思います。

清水：はい、ありがとうございます。いかがですか。これから先の体育として、いろいろと考えられるところも随分とありましたけど。水上先生どうでしょうか？

水上：先生、ありがとうございました。私も谷口先生がおっしゃっていた体育人的なパラダイムに拘束されていて、あらかじめ見出すべき結果を想定して研究をしているのではないかと、ということについて、やはりそうになってしまうなというか、そういう経験も度々論文で書いてきたなと思っています。とはいえ、実際やっぱり社会学というベースの中で、体育とかスポーツを考えようとしたときに、やはり社会的な理論だとか概念だとか、それからフレームワークだとか、こういったものにやっぱりどこか頼るといいます。そのフレームの中で、体育スポーツをどう見るかというのは、やはり常に社会学という立ち位置から抜けきれないのかなと思ってきました。私も荒井先生の教を請うてきたときにすごく感じたのは、やはり体育スポーツの側からいかにその概念や言葉を紡ぎ出していくのか、新たにどんな語をつくっていくのかという点をすごく問われていて、そこで「コートの中」とか「外」だとか、「ゲームズマンシップ」だとか、それから「がんばれ、リラックス」だとかですね、そういった言葉が2項対立の図式から出てきたわけですけども、こういう体育社会学研究の方向性というものについてですね、迷いつつも、次のステージに向かって何か研究の問いを自分の中に位置づけようとしています。やはり社会学の概念フレームと、体育スポーツの側から紡ぎ出していく言葉というか、概念との関係性といえますか、そういったものへのジレンマというか葛藤というか、こんなことを感じつつ研究をしてきているわけですね。

質問になってないかもしれませんが、やはりどういう立ち位置で社会学との関係を持てばいいのかということについて、改めて先生の言葉から、何か気づきがあればいいなというふうに思っています。

菊：はい、ありがとうございます。今、お話されたことで思い出すのは、例えば私が大学院に入った時、一貫制、つまり5年制の博士課程だったんですけど、先生から最初の2年か3年ほどにかく社会学の本を読めと。君たちは圧倒的に社会学の知識が足りないのだから、社会学の本を読みなさいって言われたんですね。それで、授業以外に週に1回、デュルケムとか、ウェーバーとかジンメルとか、いろいろな社会学の古典と呼ばれる著書を自主的な研究会で読みました。今から考えると、そこにはやはり体育社会学を担う先生たち自身も、社会学に対するある種の劣等意識というのかな、社会学って言ってるけど、社会学になっているのか、なっていないのか？みたいなね。そっちの方に引っ張られているんだろうと思いました。で、実際に私も勉強してみて、もちろん自主勉強ですので、誰かに正当に教えてもらったということではないので、片っぴしから本を読む形でやったんですけども、ふと考えると、やはり徹底的に社会学とは何ぞやということのある意味で追求した方がいいと思ったんですね。というのも、社会学にも様々な考え方があって、様々な方法論があってということが当然のことながら見えてきます。その結果、そこに我々が対象とする身体だとか運動だとか、スポーツだとか、体育だとか、そういうものを対象にして何が見えてくるのか、今まで見えなかったものが見えてくる場合もあるし、逆に見えていたものが逆に見えなくなってしまうということもあるんですね。つまり、ある社会的なパラダイムに

依拠し探究していくエネルギーをもう一度、体育やスポーツという対象に向けてインボルブしていくとか巻き込まれていく、そういう作業というのが、連辞社会学は特にそうだと思うんですけども、あると思うんです。

ただし、さっきの谷口さんの話しの中にあつたように、どうしても体育やスポーツをやってきた人たちというのは、過剰な実践性というものを中心にしてやってきているので、その知のパラダイムについては、多少適当に扱ってやればいいのかみたいな、ある種の劣等意識みたいなものが先に立って、何かこう引いてしまうと云いますか、そういうところがあるのかなと思うんです。しかし、それはまったく間違っていて、体育やスポーツの現場にやはりいるからこそ、それを経験してきて、そういう制度の枠組みの中にいたからこそ、様々な問題が発見されるわけで、その問題を問いとして構築していくプロセスと、やはり社会学が問題を構築していくプロセスというのが、その共通性と異質性を含めてどこにあるのかということ振り返ってみると、自分たちの問題の独自性というのか、そういうのが見えてくるのではないかと思うのです。つまり、何を言いたいのかというと、リフレクティビティ、再帰性がやはり大事だと思うんですね。常にこう反省し、反芻しながら、現象を見ていく、私たちはそういう立場にいるということなんです。やはり、開き直るといいますかね、そういうことも大事なのではないか。その開き直りモードが、例えばスポーツ社会学会でいうと、社会学プロパーの人たちも、もちろんそうでない人たちもいるとは思いますが、少なくともスポーツ社会学に入ってくる社会学の研究者、プロパーの人たちというのは、むしろその違いがあるから面白いと言うわけです。だから、そういう学問的なレベルで見ると、体育社会学研究は社会学プロパーからみても非常に重要な研究をやっているのだという自覚と同時に、やはりそれは実践的なレベルにもつながっていく話なので、そこには体育社会学者として二重の喜びを感じる研究ができるのではないかというふうに、私は勝手に思っていますけどね。

だから、水上さんもそういう意味で「クラブネッツ」を自分で実際に運動論としてやられたんだろうと思うんですけど。今日は強調しませんでしたけども、体育社会学は学校体育だけではなくて、そういう社会体育の方面、地域スポーツの方面、住民スポーツ、まさに生活とスポーツとの関係においても、当然考えるフレームを与えてくれるのではないかというふうに思います。

水上：竹之下先生が最後に図版化した点線の外に【スライド p.18】、私はあの点線の中でいい思いをしなかった体育人でもありますので、やはりどこか点線の外から、点線の中の世界を見ているような、そんな立場で研究してきたのかなというのは、あの図版からすごくよく理解できました。ありがとうございます。

菊：はい、こちらこそありがとうございました。

清水：ありがとうございました。浦久保さん、いらっしゃいますか。

浦久保：菊先生、レクチャー本当にありがとうございました。私は実務でスポーツ関係の仕事をしていただいている、ゼミとしてはもう 30 年ぐらい前になるんですけど、大阪体育大学の池田勝先生、あと永吉先生のところにいた人間です。昨今は、水上先生と、いろいろ意見交換させていただいています。大変高名な方々が多数いらっしゃる中で恐縮ですが、今日キーワードとして、根拠のない信頼であるとか、過剰な実践性みたいなところは、私の立場からすると、マラソン大会の運営に携わったり、実は学

校体育の中で高校生にスポーツ探求の授業を教えていたりとかする中で、実は繰り返し自分自身で自問自答する中で、ああいうキーワードではなかったのですが、やはり非常に大事な観点かなと思いました。

今日のレクチャーを拝聴して、まさしく実務家として、その実務の中の抽象度をどうやって上げていって、俯瞰しながら、またそれをちゃんと実践として展開していくのかという、その重要性を今日ひしひしと感じましたし、勉強になりましたので、感謝を申し上げたいなと思っております。

もう1点は、そういった中で、わずかかもしれませんが、本当に実務家のような、私のような身分の人間でも、しかもフリーランスの人間でもこの講義を聞いておりますので、ぜひ学究の先生方の中にとどまらない形で、ぜひ共有をしていただきたいと思います。我々実務者にとっても、今本当に社会自体が複雑化していますし、人の生き方も複雑化してる中で、こういったスポーツのありよう、しかもデジタルとかビットの世界が進む中で、ますますこの後の時代、昨日も別のセミナーを視聴していたのですが、シリコンバレー的なスピード重視の成長とか発展とかが、現在のイノベーションの先端ではなく、むしろアトム（原子）の世界に今後戻って行って、その中で日本のありようなど、複雑さの中で少子高齢化が進む中、課題解決みたいなものも見えてくるのではないかなという指摘などが現地で活動されている方からの指摘にありました。実は、起業家とかベンチャーの方なんかでも、そのような議論があるので、ますます私など実務家はこういうような勉強会を拝聴させていただいて、向学したいと思っておりますので、是非ともまた引き続きこの活動に参加できる限り、勉強したいと思っています。感想で恐縮ですが、引き続きよろしくお願ひします。

菊：ありがとうございました。今日は、先ほどもちょっと言いましたけど、社会運動論との関係をあまり言わなかったのですが、体育社会学は学校体育の現場という子どもたちを対象にして、子どもをどう育てていくかということを出発点にして、ある意味で実務的な状況、経験的な状況から社会的な視点というようなものでもって、その問題点を明らかにしていくということを出発点にしているわけです。逆に言えば、それは水上さんが言っている点線の外にも、どんどん広がっているわけですし、そのことによってどういう影響があるのか、むしろその影響がマイナスの面も含めて、影響があるからこそ、どのような影響を排除していかなければならないのか、そういうことを研究者と一緒にですね、実務をやっている人たちと手と手を携えて、実践的な解決に向けた議論が必要になってくるのではないかと思います。だから、最近、アクションリサーチであるとか課題解決型プロジェクトといった、実際に研究者がこういう実践的なフィールドに入って行って問題を解決していくという手法がありますが、そういったところも体育社会学はもっと重視していかなければいけないテーマかなというふうには思います。以上です。

浦久保：ありがとうございます。まさしく点線を日常の日々の中で往来している人間として、大変参考になりましたので、再度感謝申し上げます。

清水：どうもありがとうございました。竹内さん、お待たせいたしました。

竹内：関西大学の竹内と申します。先生、今日はありがとうございました。大変勉強になりました。今日のお話の結びのところ、体育ないしスポーツをめぐるいろいろな物事をきめ細かく捉えて解体し、そして再構築していくみたいな結びだったと思うのですが、その部分についてお伺いしたいと思います。端的にお伝えすると、再構築という点において、体育社会学が果たしてきた働きとは何かを再度お伺い

したいなと思います。と言いますのは、社会学もそうだと思うのですが、問題をあぶりだすのは比較的、得意な学問分野なのだと思うので、それに対して何か特定の提案をすとか、再構築を含むことなのでしょうけれども、その軸足がどちらかと言えば問題を暴き出すみたいなの、今までなかった視角から捉えて、新たな問題をあぶり出すみたいなのところに軸足を置いている領域なのかなと感じています。だから、体育社会学が再構築という点において、どのような働きを示してきたのか。それはもしかしたら、先生の今日の発表資料の8ページ目に近いお話なのかなとも思うのですが、つまり、体育というものが決して一枚岩ではなくて、ある農村ではこういう体育があるし、特定のコミュニティではこういうタイプの営みがあるし、対象としてもマイノリティに関する議論が広がってきた中で、再構築という点から、この学会がどういう働きを果たしてきたのか。あるいはこれから、私たちが学会員として社会学の再構築を提案するとすれば、こういうことについて自覚的に気をつけておいてほしい、というようなことがあれば、御教示いただければと思います。よろしくお祈いします。

菊：今のご質問は、体育社会学に限らず、今の日本学術会議の問題ですよね。私も連携会員をやらせてもらっていますので、広く言えば、いくら学者が、研究者が、その制度の内部で、真つ当なことを言っているとしても、要するにそれが一般の市民にいかにか伝わっているのか、いかにか理解されているのか、ということからいうと、やはり誤解されたりとか、支持されなかったりする部分があるわけです。つまり、コミュニケーションがきちんととれてないということを痛感します。

やはり体育社会学はある意味で学校の現場をどうするか、体育という営みをどうするのか、そういう過剰な実践性を持った体育教員が研究を始めると、先ほども言いましたように、どうしても肯定的になります。自己肯定的になって、つまり政策的なものを引き受けて、それを実務的に広げていくという、そういうことについての社会学の研究だったのだろうということです。つまり、自己批判がそこにはないわけです。再構築して解体するためには、まず批判をしていかなければならない。それをいかにある意味で、ある人にとっては、それはよかったかもしれないけれども、ごく少数の人たちにとっては、それは非常に問題のある内容を含んでいるんだという、両義的な価値性、両義的な部分をやはりしっかりと客観的に見据えながら、むしろそこでマイノリティに寄り添うことによって、マジョリティの問題も解決できるのではないかという、そのような視点が重要ですね。

おそらく、竹内さんもそういう活動をされているかもしれませんが、先ほど言ったアクションリサーチ、研究者がその現場に飛び込んでいく、飛び込みながら自分の理論ないし考えていたものを実際にやってみる。その対象が研究の対象者であり、自分がそこに加わっている、巻き込まれている、インボルブされている存在であるということも含めて、そこで何かお互いに解決を導く何らかの結論をつくっていく。そういう営みがそれぞれの体育社会学研究者の中に生まれてくると、これはかなり大きな研究の地殻変動に結びついていくのではないかという気がします。日本学術会議の内容はわからないのですが、体育社会学はわかるよという人たち、そういう一般市民の人たちが増えてくると、それはスポーツが好きとか嫌いとか関係なく、「私はスポーツは嫌いだけれども、体育社会学が言っていることはわかるよ」「そうだね」という理解の仕方を促進していくことは、体育社会学がどういう研究や運動論を進めなければならないのかという問題の解決につながっていくように思います。

竹内さんの今考えてることと共鳴するところがあったらありがたいのですが、いかがでしょうか。

竹内：ありがとうございます。私は、まさに高校の時に不登校で、体育もあまり好きになれなかったのですが、スポーツ社会学会とか体育社会学会の会員として活動を一緒にさせていただいているので、今

のお話は、すごく血の通ったレベルでわかるところが多いといいますか、感覚として感じるものも多く、だからこそ提案できるものもあるだろうと信じて、研究をやっているのですが、先生のご回答いただいた「批判」と「解体」と「再構築」という単純な話ではなく、その逆照射的なものを含むとか、二項対立的な立場に簡単に行かないところに議論を持って行って、かつそれがいろいろな方に伝わるような形でアウトプットしていくことが大切なんだと理解といいますか、叱咤激励を頂戴したような感じで受け取っています。ありがとうございます。

菊：私は、先ほどリコンストラクション、つまり「再」ということを強調したのですが、それが例えばデリダ風に「脱」でもいいわけで、デコンストラクションでもいいわけです。あるいは、アンチコンストラクションかもしれません。まったくそれまでとは違う体制を創造してみること（それはアナキズム的な性格を帯びるかもしれませんが）。私は今のスポーツに、そういう力があるかないかと言われると、（残念ながら）ないと言わざるを得ないのですが、逆に、やはり体育社会学から照射するからこそ、先ほどの体育の話ではないのですが、スポーツをもう一回再考できる、そういう視点が生まれてくる可能性もあり得るのではないかと思います。

今までは、体育大会はもう古いよと言われていたんだけど、その古さの中に、実は **something new** が今だからこそ見出せるかもしれません。それは単純に、かつての体育を礼賛するとか、そんなことでは全然なくて、批判しつつ、それを解体しながら、まさにマイノリティの立場で一つの図を描いていく可能性です。そういうところに繋がっていくのではないかと思います。それはやはり社会全体の考え方にもつながっていきますね。体育的なスポーツが変われば、社会も変わっていく可能性があるんじゃないかなと。それはこれまでの体育的な身体の問題にもつながっていくと考えるわけです。ぜひ竹内さんの研究を進めていってください。期待しています。

竹内：はい、ありがとうございました。

清水：ありがとうございました。最後、コンストラクションという話から、いかに体育社会学が、そして文化として体育社会学が再生するのか、そうした視点まで話が進んだように思います。

そろそろ時間になってきました。本日は、菊先生にさまざまにお話ししていただきました。体育社会学という学問、その学問の系譜、そしてそれが持っている可能性、そして我々がそれを思想として考えること、実践として考えること、その身体性までお話ししていただきました。若い人にとっても、荒井貞光から佐伯聰夫（後に、年詩雄）まで出てきて、いろいろなことがわかったことと思います。改めて、菊先生、どうもありがとうございました。

菊：こちらこそ、どうもありがとうございます。皆さんにとって何らかの刺激になれば幸いです。